

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業 終了時活動報告書

提出日：2026年7月15日

1. 案件の概要	
(1) 案件名	南アフリカタウンシップエリアの聾学校でのインクルーシブアートワークショップ
(2) 実施団体名	任意団体ポポ・エ・ペレ (Popo ea Pele)
(3) 団体所在地	神奈川県中郡大磯町
(4) 団体ウェブサイト	https://popoeapele.wixsite.com/popoea-pele Instagram: @popoeapele
(5) 実施期間	2026年2月2日 ~ 2026年7月30日
(6) 実施国	南アフリカ共和国
(7) 活動地域	ハウテン州レナシア (MCK Special School for the Deaf)
2. 活動概要	
(1) 活動の背景	
<p>南アフリカの多くの聾学校では、特に旧タウンシップ地域において、美術や創作活動を通じた自己表現の機会が制度的・物理的に限られている。教育資源の不足により、聾児は進学・就職の選択肢を持ちにくく、自立が困難な状況に置かれている。また、南アフリカでは2023年に手話が公用語として認定され、聾文化を独自の言語文化として尊重するアプローチが制度的に広まりつつある。こうした背景のもと、視覚言語である手話とアート表現の親和性に着目し、聾児が「自らの文化を肯定し、社会と対話する」経験を積む場として本事業を企画した。</p> <p>当団体はこれに先立ち、2024年にレソト王国の聾学校、2025年に南アフリカの聾学校 (Wits大学SASL学科・Pentel南アフリカの協力) においてアートワークショップを実施しており、本事業はその実績と知見を基盤としている。</p>	
(2) 活動の目標	
<p>創作活動を通じて、聾児が手話という言語と視覚文化に誇りを持ち、自らの経験や価値を社会に伝える力を身につけることで、「自らを語れる」存在として成長する。さらに、聾学校と地域社会との間に相互理解と対話の場が生まれることで、聾文化の社会的な可視化と共存の可能性が広がり、教育や社会参加の選択肢が広がっていく。</p>	
3. 活動の結果	
(1) 実施した内容	
<p>2026年3月、ハウテン州レナシアのMCK Special School for the Deaf (以下MCK) において、1週間にわたるアートワークショップを実施した。対象はGrade R~Grade 11の児童・生徒およびその担当教員であり、Wits大学SASL学科の学生ボランティア (手話通訳・サポート) が全日程に同行した。また、Neema Foundation for the Deafの関係者もオブザーバーとして参加した。</p> <p>ワークショップは以下の2種類を実施した。</p> <p>クレヨン表現ワークショップ (全学年対象・Grade R~11) Pentel南アフリカから寄付を受けた赤・青・黄の三原色クレヨンのみを使用し、「自分の色」をテーマに抽象的な自己表現を行うワークショップ。白紙とクレヨン3色のみを渡し、「特定のものを描くのではなく、自分の内側にある色を線や点で表現すること」をインストラクションした。混色 (三原色から紫・橙・緑などが生まれること) のデモンストレーションも実施し、色を「作る」体験を促した。30~60分で完結し、就学前 (Grade R) から実施可能な内容である。</p> <p>自然素材ワークショップ (Grade 4以上対象) 学校敷地内・周辺で採集した土・オーカー・灰などの自然素材から顔料を手作りし、それを使って共同作品を制作するワークショップ。素材の採集・粉碎・顔料化・描画という一連のプロセスを通じて、南部アフリカに古くから存在するSanの人々のrock artの技法につながる創作体験を提供した。複数日にわたって制作を進め、最終日に完成した共同作品を学校に寄贈した。Wits Origins Centreのキュレーターの助言を受けてオーカーの採集も行った。</p> <p>ツールキットのオープンアクセス公開により、関与した聾学校・Neema Foundation for the Deaf・Wits大学SASLネットワークを通じて、ハウテン州以外の地域 (フリーステート州等) の聾学校関係者への配布・普及</p>	
(2) 実施結果	

両ワークショップとも、当初の目標どおり実施した。クレヨンワークショップでは、年齢・学年を問わず多くの児童・生徒が紙一面を使って集中して取り組む様子が見られ、作品はいずれも個性的なものとなった。自然素材ワークショップでは、素材の採集から制作まで一貫して児童・生徒が主体的に参加し、大型の共同作品が完成した。担当教員からは、アート教育のリソース不足という課題と、こうした実践的なアプローチへの強い関心が示された。

本事業の最終成果物として、教育現場が独自に継続・応用できるアートワークショップツールキットを2冊作成した。

Toolkit Vol.1「Colour from the Earth」（自然素材・顔料づくり編）：土・オーカー・灰から顔料を作る方法、道具の代替案、バインダーの使い方、ファシリテーターへのガイドを含む英語版ドキュメント。Grade 4以上対象。Wits Origins Centreへの謝辞を掲載。

Toolkit Vol.2「My Colour」（クレヨン表現編）：三原色クレヨンを使った抽象表現ワークショップのロジック・ファシリテーション手順・スクリプトを含む英語版ドキュメント。3歳から実施可能。Pentel南アフリカへの謝辞を掲載。

両ツールキットはMCK担当教員に共有済みであり、本報告書提出前にPopoウェブサイト上で無料公開予定。Wits大学SASL学科およびNeema Foundation for the Deafへのデジタル配布も実施予定。

(3) 事業を実施して得られた教訓など

ツールキットという形で成果物を整備することで、外部ファシリテーターなしでも継続できる「自立発展性」を事業設計に組み込むことができた。教育現場のリソース不足が深刻な文脈においては、ワークショップ単体より再現可能な教材の方が長期的なインパクトを持つという認識を得た。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針

本事業を通じて構築した聾学校・支援団体・大学との関係を基盤に、当団体は以下の方向で活動を発展させていく予定である。

アート実践については、南アフリカの聾コミュニティとの共創・展示活動を継続し、聾文化と視覚表現の接点をより深めていく。あわせて、本事業での実践知見を含め、聾コミュニティにおけるアート教育・文化実践のリサーチとアーカイブ化を進める。

中長期的には、アートやクラフトの生産を通じた南部アフリカの聾コミュニティの雇用創出を視野に入れており、現在プロダクトのプロトタイプ制作を開始している。生産ラインの整備に向けては、国際協力系の助成金を2026年度中に申請予定である。

これらの活動を継続的・組織的に進めるため、現在日本国内で一般社団法人の設立登記手続きを進めている。法人化により、日本・南アフリカ双方での資金調達と活動基盤を整えていく

4. 活動中のエピソードなど

ワークショップ期間中、Wits大学SASL学科のボランティア学生の中に、フリーステート州出身の学生が含まれていた。同州には聾学校が2校しかなく、教育資源が特に限られていることを話してくれた彼女は、ワークショップ終了後に「フリーステートでも同じことをやってほしい」と直接声をかけてきた。こうした現場からの声が、ツールキットを通じた普及というアプローチの必要性をより強く確認させてくれた。

また、Neema Foundation for the Deafの関係者がオブザーバーとして参加してくださったことで、MCKへの支援ネットワークと本事業の接点が生まれた。

5. JICA基金活用事業を実施したことで団体にとって良かった点・成長に繋がった点

JICA基金を通じた事業実施は、任意団体として活動してきた当団体にとって、組織運営・経費管理・報告といった制度的なプロセスを経験する初めての機会となった。事業の目的設定から成果物の設計、関係者との調整、そして終了時報告という一連の流れを経験したことで、法人化後の助成事業運営に向けた実践的な基盤を得ることができた。

また、教育現場での実践を通じて、アートを「表現の自由と安全」として位置づけるトラウマインフォームドアプローチの有効性を確認できたことは、今後の活動の理論的・実践的基盤となる知見である。

6. 活動の写真



クレヨンで無我夢中に絵を描く低学年の子どもたち	自然素材で作成した顔料で絵を描く子どもたち
	
収集したオーカーを砕き、顔料にするワーク	南部アフリカで古くから顔料として使われてきたオーカーを収集
	
顔料を作るために校舎内の植物を収集する様子	植物から収集した顔料は、職業訓練コースの子どもたちと一緒に顔料化した